

序 章

聖学院大学の新たな挑戦のために

聖
学
院
大
学

今日、価値観やライフスタイルの多様化、大衆化の進んだ時代状況にあっては、大学は、嘗てのように社会をリードする研究者や英才を世に輩出することのみをもって、その使命・教育目標とすることは出来なくなっている。大学は、従来は最高学府として、高等学校卒業後の生徒が次の4年間に学ぶ教育機関であり、多くの者にとって最終学歴であった。しかし今日では、高等学校、大学、社会と、生涯にわたってなされる教育の一翼を担うものとなり、社会人、主婦、再入学者、留学生、高齢者など多様な志願者を受け入れ、高等教育が、職業、国籍、年齢差・世代を超えてなされるものであるという認識が進みつつある。

こうしたいわゆるバリアフリー化、ボーダレス化現象によって、高等教育における大学独自の使命や役割が曖昧になるとともに、大学にも、深い専門性と同時に広い教養、教育効果の厳格な測定と柔軟な対応、在学期間中と同時に生涯にわたる学習を推進する視点等々、いわば対立的概念の両極にある価値を同時に実現することが求められるようになってきており、教育の照準を定めにくくなっているのも現実である。そうした中ですべての価値を「あれもこれも」実現することは困難であるゆえ、個々の大学は「あれかこれか」の価値を主体的に選択することによって、それぞれ独自性を見出していかなければならなくなる。

さて、第Ⅰ部・第1章で明言されるとおり、聖学院大学の教育の根幹はキリスト教である。キリスト教は、世界に向かって宣教することを説く世界宗教である。異邦人や社会の弱者に対しても開かれ、その出自からして反ナショナリズム的性格を強く持っている。その意味では、大衆化・多様化・グローバル化・ボーダレス化など、現代の高等教育に生じている現象は、キリスト教それ自体の性格ともきわめて類比的であると言える。しかし、キリスト教において、その外的な枠組みが柔軟になり、ボーダーが緩やかになっても籬が緩んでしまわないのは、その中心に信仰という核があるからである。

聖学院大学の教育の特色は、まさにこのキリスト教的構造である。教育は世界に対して、また何人に対しても開かれているが、物質主義、拝金主義、刹那主義が横行する中で、核になるのはキリスト教的人格教育であり、本学のスクール・モットーのひとつ「*pietas et scientia*」が示すように、深い学問的探究心を求心的に支えるのは敬虔な信仰の情熱である。聖学院大学の理念第2条ではプロテスタント・キリスト教の伝統にのっとり「自由と責任と活力」を我がものとするのが求められ、第3条では「真剣な学術研究と生きた教育、霊的強化」が謳われているが、この理念は、まさに現代の教育的課題に応えるものである。したがって聖学院大学の教育目標は、この「聖学院大学の理念」をいかに具体化して現実の教育に活かすかという課題に尽きる

聖学院大学

と言える。

振り返れば、聖学院大学は1988年4月に文部省認可を得て発足した。最初は政治経済学部政治経済学科の単一学部、単一学科から出発し、その入学定員は200名というきわめて小さな大学であった。その後、1992年4月には第2の学部として人文学部を創設し、それぞれ入学定員50名を有する2つの学科、欧米文化学科と児童学科を設置した。また1996年度には、政治経済学部の上に最初の大学院として「政治政策学研究科」（修士課程）を創立した。さらに1998年度には、女子聖学院短期大学の改組転換を機に大学創立10周年を記念して人文学部に人間福祉学科と日本文化学科を増設、人文学部の既存の学科を含めた各学科の入学定員は各100名となった。2000年度には、既設の政治経済学部政治経済学科に加え、同学部にコミュニティ政策学科を新設し、入学定員は政治経済学科および新設のコミュニティ政策学科とも各100名とした。2004年度には人文学部から人間福祉学科と児童学科が分離して人間福祉学部を構成し、現在、3学部6学科合わせて600名の入学定員、総定員2,400名を擁する大学へと発展した。

また、大学院もさらに発展しつつあり、1999年度には「アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科」（博士前期課程）が設置され、2001年度にはこれに後期課程が加わり、さらに2006年度には「人間福祉学研究科」（修士課程）が設置されて現在に至っている。

本学の母体である学校法人「聖学院」は、遠く1903年（明治36年）に誕生し、2004年には設立100周年の歴史を刻んだ。そのはじめはアメリカのプロテスタント・キリスト教の流れをくむディサイプルス派の宣教師が、1883年に日本に遣わされて宣教活動を始め、やがて学校教育においてその業が「聖学院神学校」として実を結んだことである。その後、幼稚園、男女それぞれの中学校、高等学校、戦後に至ってさらに小学校を設立し発展を続けた。そして、一貫教育の願いが一般社会の高学歴志向と相俟って、1967年（昭和42年）の女子聖学院短期大学設立に至ったのである。

聖学院は聖学院神学校発祥の地である東京都北区中里の高台にあり、法人全体の本部と幼稚園から中学校、高等学校までの校舎はいずれもその地にあるが、すでにその地には新しい学舎を容れる余地がなく、駒込からさらに北に位置する大宮・上尾の地に、まず女子聖学院短期大学を建設した。この「大宮・上尾」に種が蒔かれ芽生え育ったキャンパスに聖学院大学が誕生することになったのである。つまり1978年には児童教育学科の増設とともに附属幼稚園（現聖学院みどり幼稚園）が誕生し、1988年（昭和63年）には法人初の4年制大学として聖学院大学政治経済学部が設立された。また大学創立と同時に、高等教育機関としてあわせて研究を本務とする「聖学院大学総合研究所」、数年遅れてさらに研究の成果を世に問う「聖学院大学出版会」も出発することとなり、その後1996年には大学院の創設に至って、幼稚園から大学院までの一貫教育の歩みの道筋が完成したのである。

聖学院大学

このように大学創設から今日まで 19 年の歴史が経過しているが、その間も聖学院大学は、それに遡ること 100 年以上に及ぶ歴史をもつ聖学院教育の伝統を継承し発展してきた。その教育の理念はプロテスタント・キリスト教精神に基づく教育を目指しており、具体的には法人全体のスクール・モットーである「神を仰ぎ、人に仕う」、さらにそれに基盤を置いて、教育、学術研究の府としてのモットー「*pietas et scientia*」(敬虔と学問)に従って教育活動が営まれてきた。法人の設立理念は着実に実を結び、2004 年には法人設立 100 周年の記念事業として、念願であったチャペル・講堂棟が完成し、周辺の整備も進んだのである。

このように、学校法人聖学院は、120 年以上前に布教のために来日した宣教師たちの志を継承しつつ、また聖学院大学は特に、設立に先立って起草された「聖学院大学の理念」を目に見える形で現実化しつつ、今日に至っている。本学は、明確な建学の理念の下に設立された、数少ない大学の一つであり、これは聖学院大学の新しい挑戦であった。

しかし、3 学部 6 学科体制が完成したのは 2004 年度のことであり、未だ成人に達しない若い大学であるゆえに「大学の理念」の現実化の過程も未だ道のりの途上にあるといえる。併せて今日、社会的価値観の多様化、受験生の多様化が進み、これに「少子化」による 18 歳人口の急激な減少が加わり、前述のごとく、高等教育をめぐる趨勢はめまぐるしく変化している。そして大学という教育研究機関にまで競争原理が忍び寄ってきている。こうした趨勢にあって、大学の理念と社会の現実との溝をいかに小さくし、現実を見つめつつしかも現実には引きずられることなく、教育の理想を実現していくかということは本学にとっての課題である。間もなく大学創立 20 周年を迎えようとしているこの時期に、これまでの教育を省み、先人たちの高邁な理想が現実の教育に正しく具体化されているかを点検することは意義のあることである。

今般、本学は全学を挙げて自己点検・評価を実施するとともに、その結果を財団法人大学基準協会に報告し、第三者による相互評価を委ねることになった。第三者からの評価を受けることは、本学が社会に対して客観的妥当性を保持し、公的な教育研究機関としてその社会的責任を果たす上での重大責務であると自覚している。本学は、この審査結果に謙虚に耳を傾けて、また新たなる決意で「前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走る」(聖書、ピリピ人への手紙第 3 章 13、14 節)挑戦を続けていく所存である。